

山口洋子

なにが愛なのかしら

離れられなくなる時 嫌になる時



後から気がついたって間に合わない
このことだけはイマが問題
これからの自分にとって確認しておこ

読者のみなさんへ

この本をお読みになって、特に感銘をもたれたところや、ご不満のあるところなど、忌憚のないご意見を当編集部あてにお送りください。

また、わたくしどもでは、みなさんの斬新なアイデアをお聞きしたいと思っています。

「私のアイディア」を生かしたいとお思いの方は、どしどしお寄せください。これからの企画にできるだけ反映させていきたいと考えています。

なお、採用の分には、記念品を贈呈させていただきます。

青春出版社 編集部

なにが愛なのかしら

プレイバック
PLAYBOOKS

著 者 山 口 洋 子

発行者 小 澤 和 一

発行所 東京都新宿区 株式会社 青春出版社
若松町12番1号
〒162
電話 編集局 03(203)5123
営業局 03(207)1916 振替番号 東京9-98602

印刷・中央精版印刷

製本・誠幸堂

ISBN4-413-01474-X

© Yoko Yamaguchi 1988 Printed in Japan

なにが愛なのかしら

—— 離れられなくなる時 嫌になる時 ——

山口 洋子

プレイブックス
PLAYBOOKS

*なにが愛なのかしら
〔目次〕

1章「もつといい男ひとがいるかしら」

でいつも女は迷う

9

1 間違つて選んでしまった愛 10

2 女のすき間に入り込んでくる奴 17

3 すぐ本心を見せる男つて気をつけなさい 28

2章 女の愛はすべてこの計算から始まる 35

1 二度目に豹変する男 36

2 いたした男がずるいのか 許した女が甘いのか 44

3 初めから無理のある関係 52

3章 皮もむかずに好きになる女 63

1 裕さんにもう一度会いたい人 64

2 男の笑顔と哀しみの関係の読み方 72

3 ダサイ、古い、格好悪い男でも 83

4 嫉妬心は女のガソリン 90

5 男が本気に愛したら怖い 101

4章 あんな悪い女がなぜ男を

夢中にさせるのか 109

1 「身体よりもハート」のウソとホント 110

2 理想的なカップルの計算違い 121

3 安っぽそうに見せる技術 130

4 いい女に見せるための切り札 137

5 とり返しのつかない事態になる前に 145

5章 男が最後の最後まで見せない

“本心”の触わり方

153

1 女の愛の告白は男の別れの言葉にもなります 154

2 忙しい男と暇な男とのつき合い方 162

3 デートの新心得 169

6章 好きな女を嫌^{イヤ}になる瞬間、

離れられなくなる瞬間

179

1 男とうまくいく女の愛の秘密 180

2 セクシーな女の本当の幸せ 187

3 男は冷めないうちに 194

4 これが大人の愛の清算のしかた 203

本文イラスト・東 芳純

企画プロデュース・フリーウェイ

1 「もつといい男^{ひと}がいるかしら」
でいつも女は迷う



1 間違つて選んでしまった愛

——惚れちゃった男は格好わるい。

——惚れさせちゃった女は格好いい。

恋愛関係においては、はつきりこういう図式がなりたつ。

まして惚れちゃった方がかなり相手より年上である場合、これは男、女にかかわらず「へえ、そうなの……やっぱリィ」といくばくかの憐憫れんぴんの表情で、世間から見下される。

かように年齢というのは、男女の恋愛関係において絶対的不戦勝を意味する。

これを逆手にとって己れの魅力を何とか誇大にひけらかしたい熟女たちは、若い男を自分惚れさせる。

こうすると、惚れさせた女は格好いいのうえに、いやがうえにもプラスの自己満足が得

られる。

それでいつとき年増の若い男狩りがやたら流行したが、この傾向は女上位社会確立の今日、もはや廃れることなく続くであろう。

若い男の方はべつだんさほどおばさんに惚れちゃってるわけではなく

「年上の女って便利だろ。金はあるし、センスもまあまあ、いざ別れるっていつでも筋が通りゃあっさり引き下がってくれるしさ」

小便くさい小娘より楽でいいだけが本音かもしれないが、おばさんの方は連れ立って歩く見ただけでも充分大満足している。

「ねえねえきいてよ。今度の私の彼さあ、十も年下なのよ」

他人に恋人のことを得意そうにひけらかす場合、まず先に年齢差のことがくるのは、自分か年齢にコンプレックスを感じている証拠でもある。

これはむろん、男の場合とて同じで

「おいおい、俺の彼女いくつ知ってるか。十九なんだぜ、十九、イヒヒ……」

首すくめて世にも嬉しそうな表情をしている中年をみると、ああこのひともついに年貢

のおさめどきかと思ってしまう。

さてこういうおばさんと若いつばめ、おじさんとギャルなどという関係は、いまどきいくらでもありふれた類型パターンで、べつに驚いたり文句をつけたりする筋あいはないのだけれど、こいつが我が青春を賭けた永遠のアイドルや、幻のスーパースターだなどということになる。「オヤ、そう」「アラ、ほんと」だけでは済まない。

むろんスターだって人間だ。中年になって若い女との恋に浮身をやつしてしまうことも一種の成りゆきとして仕方のないことかもしれないが、このいかにも当たり前前の、誰にでもあてはまる図式だけではけっして治めたくない。

で、ここでありていいいきるならば、かのカリスマの大スター沢田研二氏におかれましてはこのさい何とか

——惚れちゃった男は格好いい。

——惚れさせちゃった女は格好わるい。

と最終的にはこの恋愛結果を逆転させ、昇華させるまでがんばっていただきたい、と心から乞い願うしだいなのであります。



好きになった男の裏顔

*

女が強くなったのか、はたまた男が弱くなったのか。

このところますます別離のイニシアティブを、女性側がとるケースがふえてきた。

「ねえ、そろそろ考えない、私達」

「こんなことばかり続けても、しょうがないと思うのよ」

「実は、あたしさあ……」

「もういやっ、こんな関係」

あるいはクールに、あるいは堂々と、または明るくさっぱり、でなければややヒステリックにと、言い出しの台詞はいろいろあるが、ともあれきっかけをつくるのは女。

その際の特徴としては、別れ話をきり出す女は、すべからず臆していないということ。

さんざん口籠もっておずおず相手の顔いろを窺い窺い話し出す男とは大ちがい。別れ話を持参して、ドーンと二人の眼の前における女は、もはや自分自身の出処進退を決めて性根が坐ってしまっている。

驚きあわてふためくのは「まさかオレの女が」とたかを括っていた男の方で、そのぶざまさに女はよけいシラシラと醒めはてる――。

身辺におけるこういう一連のケースを見聞きするにつけ、女から別離をいい出される男には、だいたい一定パターンがあることに気づいてきた。

年齢、立場、職業、ルックスは各異なれど、雄としてのなりたち、男としての姿勢、女に対する思いこみに、ほぼ共通の部分があるのだ。

まずその一、

自信家である。過信といいかえてもいいが、はつきりうぬぼれが強すぎる。その結果精神運動が一方通行で、相手のことが全然みえていない。

その二、

ケチである。自分さえよければという、がりがりの利己主義者。

その三、

約束を平気で破る。むこうに破られたモノは、破りかえしてもこちらも傷つかない。

その四、